Osaka University Knowledge Archive

Title	『ドイツ啓蒙主義研究』（1号～20号）掲載論文一覧
Author(s)	
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2024, 21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97828
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『ドイツ啓蒙主義研究』（１号～２０号）掲載論文一覧

第１号（2001 年３月）

啓蒙とは何か
　－『ベルリン月報』誌上の議論を中心に－（津田保夫）

C.F.ブレーマーの詩学をめぐって
　－模倣説の復権と新たな想像力概念の模索－（福田覚）

ケンペル『日本誌』と編者ドーム
　－「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに－（中直一）

第２号（2002 年３月）

「フリードリヒの世紀」と自由
　－カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法－（前編）（斉藤渉）

ドイツ啓蒙主義における「人間の使命」の問題
　－シュパルディングの『人間の使命』とその影響－（津田保夫）

社交術と「啓蒙」
　－クニッゲ『人間交際術』にみられる処世と啓蒙の関係－（中直一）

クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」（福田覚）

第３号（2003 年４月）

エルンスト・プラトナーの『医師と哲学者のための人間学』
　－後期啓蒙主義における新しい人間観とその学問の試み－（津田保夫）

快感情の起源をめぐるJ.G.ズルツァーの考察
　－アカデミー論文（1751/52）についての覚え書き－（福田覚）

「フリードリヒの世紀」と自由
　－カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法－（後編）（斉藤渉）

第４号（2004 年５月）

エルンスト・アントン・ニコライの想像力論について（福田覚）

シラーの『生理学の哲学』における心身問題
　－その中間力構想と神経精気論の思想的背景－（津田保夫）

フリードリヒⅡ世における公正の観念と司法の独立
　－アルノルト訴訟事件に関するドームの報告より－（中直一）

第５号（2005 年５月）

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（1）（中直一）

－ビースターおよびニコライの文書より－

「知識人共和国」は何語で話すか （斉藤渉）

－プロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者－ （前編）

ベルリンのズルツァー （福田覚）

－その生涯と活動の振幅をめぐる素描－

第６号（2006 年５月）

ズルツァーの美学事典の体系性をめぐって （福田覚）

－事典形式と理論的な体系性についての予備考察－

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（2）（中直一）

－ニコライおよびクラインの文書より－

「知識人共和国」は何語で話すか （斉藤渉）

－プロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者－ （後編）

第７号（2007 年５月）

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（3）（中直一）

－ゲッキングおよびグローナウの文書より－

陶冶の概念としての模倣 （福田覚）

－ドイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のために－

啓蒙主義者たちの大学廃止論 （斉藤渉）

第８号（2008 年５月）

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（4）（中直一）

－シュテルツェルおよびニコライ旧蔵の文書より－

連想と連関の概念としての模倣 （福田覚）

－ドイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のために－

「現在を軽蔑する権利がない」（多賀健太郎）

－啓蒙とダンディズム－

第９号（2009 年５月）

Logik als „Vernunftlehre“ （Sho Saito）

－Reimarus, Engel und W. v. Humboldt－

情動論から捉え返した詩学史記述の可能性（福田覚）

－初期啓蒙主義の「修辞学的」側面のその後を追うために－

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（前編）（中直一）

第１０号（2010 年５月）

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（後編）（中直一）

フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動（福田　覚）

－「「文化的」性道徳と現代の神経失調」を中心に－

教育の公事化（斉藤　渉）

－フリードリヒ 2 世の文教政策についての覚書－

第１１号（2011 年５月）

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について（1）（中直一）

― 総説及び第1巻の分析（その1） ―

ドイツ初期啓蒙主義の情動論をめぐって（福田覚）

― ヴォルフ、ウンツァー、マイアーが示す学際的な振幅 ―

Zu den Quellen der phonetischen Umschrift

in Abel-Rémusats *Élémens de la grammaire chinoise* (1822) （Sho Saito）

第１２号（2012 年５月）

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について（2）（中直一）

― 第1巻の分析（その2） ―

I. J.ピューラをめぐる記述課題の諸断面 （1）（福田覚）

― 敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念 ―

Die Universität in dürftiger Zeit （Sho Saito）

第１３号（2013 年５月）

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について（3）（中直一）

― 第1巻の分析（その3） ―

医学者 E.A.ニコライの「情念」と哲学者ズルツァーの「感情」（福田覚）

― ドイツ啓蒙主義詩学史の学際的理解の試み ―

18 世紀の文学外的フィクション（斉藤渉）

― パラテクストの分析 ―

第１４号（2017 年５月）

ユング＝シュティリングにおける信仰と創作（長谷川健一）

―『ヨリンゲルとヨリンデの話』を手がかりに ―

徳の教育（廣川智貴）

― Ch・F・ゲラート『スウェーデンの G 伯爵夫人の生涯』 ―

１８世紀の自死をめぐる言説の再検討Ⅰ（吉田耕太郎）

J.E.シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォクレス」（福田覚）

― 受容の2つの局面から考える詩学史の物語論的再解釈 ―

第１５号（2018 年５月）

汎愛派の知られざる教育者J・K・ヴェツェル（廣川智貴）

嬰児殺しをめぐる言説の再検討　Ⅰ　論争の背景（吉田耕太郎）

レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における父の規範と娘の葛藤（福田覚）

― 両価的感情の物語表現として見た悲劇の構図 ―

第１６号（2019 年５月）

道徳週誌『画家談論』における想像と模倣（福田覚）

― スイス派初期の作用詩学について ―

ユング＝シュティリングの敬虔主義批判（長谷川健一）

― エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』 ―

アルプスを見る詩人― ヘルダリーンとエーベル ―（廣川智貴）

18 世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容について（吉田耕太郎）

― 日本の盲人についての情報とその流布を例に ―

第１７号（2020 年７月）

文学論争におけるクロップシュトックの評価（福田覚）

― 文学論争の再考にむけて ―

ヴェツェルとウィーン（廣川智貴）

―『喜劇役者たち』を中心に ―

神童と天才（吉田耕太郎）

― 18 世紀における心的能力をめぐる議論をたどる ―

第１８号（2021 年５月）

文学論争以前のミルトンをめぐる遣り取り（福田覚）

― 文学論争の再考にむけて(2) ―

ユング＝シュティリングの「熱狂」評価（長谷川健一）

―『テーオバルトあるいは熱狂者たち』（1784/85）を手がかりに ―

ヴェツェルの教育論と『ロビンソン・クルーソー』（廣川智貴）

優しい父（吉田耕太郎）

― 親子関係から啓蒙を再考する ―

第１９号（2022 年３月）

『批判的論叢』24 号におけるミルトン批評の言説（福田覚）

― 文学論争の再考にむけて(3) ―

対話小説への道 ― J・J・エンゲルの理論と実践 ―（廣川智貴）

野生児をめぐる18世紀の緒言説 1（吉田耕太郎）

― 言説の付置の確認 ―

第２０号（2023 年７月）

ユング＝シュティリングの「熱狂」評価（承前）（長谷川健一）

―『テーオバルトあるいは熱狂者たち』（1784/85）

におけるテルステーゲン評価を手がかりに ―

ミルトンから見て取る虚飾的表現と絵画的表現（福田覚）

― 文学論争の再考にむけて(4) ―

野生児をめぐる18世紀の緒言説 2（吉田耕太郎）

― 動物と人間の顔 ―